まえがき

「貧乏なら子どもを産むな」

「働いていない、税金を納めていない人が優遇される社会はおかしい」

貧困家庭で育った体験を寄稿するようになって、こういったコメントがついたり、メッセージが送られてきたりすることが少なくない。ネットにコメントをする人が社会のマジョリティかと言えばそうとも限らないが、少なくとも一定数の本音ではあるのだろう。体感するのは凄(すさ)まじい低所得者バッシングだ。

働かない、税金を納めない。なのに権利はある。

支援を受けて〝優遇〟されている。

そんな存在が許せない。
そんな人たちを養っているのは真面目に働いて税金をたくさん納めている自分たちだ。

こういった考えは思ったよりこの社会に根づいていて、それは決して極端な意見ではなく、もはや定説となっている部分があると感じる。

貧困に関する発信を始めて、その反応に驚くことが多々ある。

「こんな貧困が日本にあるなんて、人生で初めて知った」「貧困がどういうものか初めて知った」といった感想が多いのだ。

貧困家庭で育った体験を書いた拙著『死にそうだけど生きてます』（ＣＣＣメディアハウス、２０２２年）の感想でも、「ある程度報道などで知ってはいたが、ここまでとは思わなかった」という声をよくいただく。

少しでも貧困の実像が伝わったということに書き手としてのやりがいを感じると同時に、貧困は思ったより認知されておらず、報道で目にする機会はあっても、そこから見える景色や実際置かれている状況を細部まで知るのは難しいのが現状なのだと痛感し、複雑な気

持ちになる。

正直、自分の体験した貧困は、まだまだマシなほうだという自覚がある。もちろん比べるものでもないのだが、実際もっと深刻な状況にある人を知っている。

病院に一切行けない、まともな食事が摂れない、ホームレス状態にある、小中学生でも食費を稼ぐために犯罪に手を染める、大学はもちろん高校の進学も反対されるなど、あげればきりはないが、そういった壮絶な貧困は国内にも確かに存在する。そしてそれを極めて特殊な例だとも言い切れない現実がある。普通に生きていたら関わらない、接する機会がないために、そんな貧困は存在しないと多くの人が思っているのではないか。

地方から東京に来て、驚いたことがある。ホームレス状態にある人を、ターミナル駅の近くでよく見ることだ。東京に限らず都市部や一部地域では珍しくない光景かもしれないが、私の地元のど田舎ではまずない光景だった。たくさんの人が行き交う駅の構内や広場に、ダンボールや荷車に積んだ荷物があり、そこに座っている人がいる。また、歩道に正座をして首を垂れ、投げ銭を入れる箱を置いて硬く冷たい地面の上でじっとしている人も

見かける。そしてその横を人々は気にする様子もなく通り過ぎていく。住む家がない。雨風をしのげず硬くて明るくうるさくて人通りが激しいところで眠らなければならない人がいる、その現実は衝撃的だった。

真冬に寒波が襲い、家の中で暖房をつけていても震えるような日に、支援団体の人が路上生活者の方々に毛布やカイロなどを配布していると聞いた。こんな気温の中、外で一晩を過ごさざるを得ないなんて、明らかに異常事態だ。でも、国や地方自治体ではなく、民間の有志が手弁当で駆け回っている。住む家すらない人たちがいる。多くの人がその光景に「慣れている」こともまた衝撃だった。

もちろん通り過ぎていく人の心の中はわからないし、自分だって何かすぐにできるわけではない。ただ、考えないようにしているのか、意図的に視界から排除しているのかわからないが、同じ社会に確かに存在する貧困への無関心が、このむごたらしい現状を温存しているように思えた。

私のライター活動の始まりは、地方の貧困家庭で育った体験を書いたことだった。もと

もと自分の貧困の体験について書くつもりは一切なかった。貧困に関する体験記の類いは世に溢(あふ)れていると思っていたし、自分の家庭が特別だとは思わなかった。しかし、知人の編集者に「あなたの体験を書きなよ」と言われた。メディアにいる人たちは生まれながらの強者が多く、取材して書く人はたくさんいても、当事者性を持って書ける人は少なく、そういう人が必要だ、というのだった。

そう言われてもすぐに自分の体験を書いたわけではなかったが、その後コロナ禍になり、社会の状況が一変し、私の意識も大きく変わった。コロナ禍で大きな煽(あお)りを受けたのは、非正規雇用の人々だった。仕事がいきなりなくなっても何の補償もなく、路頭に迷う人々に向けられたのは、「なんで貯金して有事に備えておかなかったんだ」「そういう不安定な仕事を選んだのは自分だろう」といった声だった。そのとき、本当に経済的弱者の実情は見えていないのだ、と思い知らされた。

さらに、給付金の金額や対象が検討され、一時は「住民税非課税世帯」に30万円という案が検討された。このときに起きたのが、猛烈な「非課税世帯バッシング」だった。もちろんコロナで打撃を受けているのは非課税世帯に限らないし、あまりに対象が狭く、反発

が起きるのは自然なことで、批判が起きるのは当然だと思う。しかし、怒りの矛先は制度を決める政府ではなく非課税世帯だった。「納税していないのに」「まともに働いていないくせに」そんな声が吹き荒れた。さまざまな理由で、低収入にならざるを得ない人の事情は、多くの人の目には映っていないのだと思った。その出来事に強く背中を押され、自分の体験を書くに至った。

コロナ禍でもそうだったように、階層の移動は不可抗力によっても起きる。誰だっていつどうなるかわからず、病気や障害などで働けなくなることだってあるだろう。いつも弱い立場の人に怒りの矛先が向かうが、低所得者バッシングで得をするのはいったい誰なのだろう。少なくとも市民同士の憎悪が煽られたところで、中間層の生きづらさは変わらないのではないか。

本書の目的は、不可視化されている見えない貧困の実情を詳(つまび)らかにすること。さらに、自らの努力の結果であり、ある程度選択可能だと思われている経済状況や社会的地位が、いかに自らの選べる範疇(はんちゅう)を超えたところで決まるのかを可視化することだ。貧困の実情

を知るには、体験ベースの話以外に、データを用いて客観的な事実を見ていく必要がある。そこで、今回は、統計を専門に扱う東京大学大学院経済学研究科の山口慎太郎教授との対談を第二部で行った。

山口教授は、経済学の中でも、労働経済学、家族の経済学、教育経済学を専攻されており、日々膨大なデータに触れる経済学者の立場から発せられる貧困の実情についての指摘は、ライターである私とは違う説得力がある。

貧困とは何か、貧困は努力によって克服できるのか、という問いを掘り下げ、みなさまと共に考える機会にできればと思う。